

氏名・(本籍地) 澤田 彰 宏 (神奈川県)  
学位の種類 博士(文学)  
学位記の番号 甲第83号  
学位授与の日付 平成23年3月15日  
学位論文題目 インドの公教育におけるセキュラリズム  
論文審査委員 主査 藤原 聖子  
副査 辛島 昇  
副査 一島 正真

## 澤田彰宏氏 学位請求論文審査報告書

### 「インドの公教育におけるセキュラリズム」

#### 論文の内容の要旨

本論文は、インドの政教分離制と公教育の関係を分析することにより、インドのセキュラリズムとはどのような性質をもつのかを、比較文化的に究明したものである。セキュラリズムは、一般には世俗主義と訳されるが、もとは西洋近代的概念である。この語は、フランスともアメリカとも異なる、インドの歴史的状況の中から形成された公共圏の特性を的確に表すことができるのか、インドの公教育がセキュラーであるというとき、それは日本でいうところの無宗教や政教分離とどう違うのかといったことが問題意識となっている。主な一次資料は、政府機関や教育関連諸委員会の法令・勧告や報告書、義務教育カリキュラム、学校教科書(国立機関発行のもの。科目は価値教育面の大きい社会科とヒンディー語を選択)である。

第1章では、政教関係に関する諸概念を整理し、インド憲法をはじめ、宗教問題に関わる法令の内容を確認した。

第2章では、なぜインドがセキュラリズムを国是とするに至ったのかを歴史的にたどった。現在のインド内の諸宗教の対立はコミュニズムと呼ばれるが、それは19世紀後半以降に出現したものである。インド国民会議派は、コミュニズムによる国家分裂を防ぐためにセキュラリズムを掲げ、その理念は独立後も受け継がれた。しかし、宗教対立が解消されることはなく、1980年代以降はヒンドゥー・ナショナリズムが台頭した。2002年頃からは教育にもその影響が及び、国立機関発行の歴史教科書において、ヒンドゥー至上主義的方向への書き換えがなされた。

第3章では、インドの教育史をまとめ、とくに公教育における宗教の取り上げ方に影響を与えた要因を解明した。教育制度の変化、ガンディーとネルーの宗教教育観、教育諸委員会の答申、現行のナショナル・カリキュラムのそれぞれから要因を取り出した。

第4章・第5章では、以上を踏まえながら、教科書の記述にインド的セキュラリズムがどのように反映されているか、また教科書はセキュラリズムの必要性をどのように教えているかを分析した。第4章は日本の公民科にあたる社会政治生活科と環境科学科の教科書、第5章は国語にあたるヒンディー語科と歴史科の教科書を取り上げた。第4章では、教科書の具体的記述の分析を通して、インド的セキュラリズムの特徴は、単に国家が特定宗教と結びつかないことだけでなく、特定宗教の伝統や慣習を取り上げるときに、その成員の感情を害しないようにすること、また宗教的多数派による少数派への支配や差別などには国家が積極的に介入を行うことであると論じた。また、宗教のとらえ方として、個人の内面よりも集団の実践にかかわる部分を中心であると指摘した。第5章では、ヒンディー語教科書の中でも、意図的に諸宗教の児童を登場させ、ともに祭りを祝う様子を描いていること、歴史教科書ではカースト問題や指定部族差別への言及が増えていることを見出した。

終章では、インドの公教育におけるセキュラリズムは、憲法の理念を色濃く反映したものであること、西洋近代的な反宗教・非宗教という意味ではなく、あえて表現するならば「諸宗教中立主義、反コミュニズム・カースト差別主義」というものであると結論づけた。

## 審査結果の要旨

本論文の最大の意義は、従来は、インドの教育といえば、教育学やインド研究内部の非常に限られた関心事であったものを、セキュラリズムという概念を通して比較文化研究の土俵にのせ、新たな視角からの分析を試みたことにある。ポストモダン・ポストコロニアルの潮流の中で、西洋近代を出自とする人文・社会諸科学の諸概念に対する根本的反省が広く行われてきたが、「宗教」と「世俗」という対概念もその一つである。人類学や宗教学など分野横断的に、近代的リベラリズムの発想で宗教と世俗の二項対立を通文化的に用いてきたことに対して鋭い批判が向けられている。その流れのなかで、セキュラリズムという概念にも見直しが迫られている。この概念は、学術用語であるだけでなく、インドの現実政治の場でも用いられてきたという点で、西洋近代的視点の非西洋圏への影響を分析する上では、非常に興味深いものである。セキュラリズムを世俗主義と直訳せず、この概念が指し示してきたものを、歴史性にも留意しながら、一度インドのコンテキストの中に置き戻し、近代以降のインド国家が、社会構造の中に宗教をどのように戦略的に位置づけてきたかを探ることは、インド教育研究という領域をはるかに越えた学問的意義を有している。

それでは、本論文がその目的を十分に果たしたかという点、まず授業の実態等ではなく教科書という媒体を分析対象として選んだことは、教育政策が直接反映されやすく、かつ教育現場においてもっとも利用されるテキストであるという点で、また、年代による変化を追いやすいという点で、本論文の問題関心に照らしては妥当であるといえる。教科書も、英語のみならずヒンディー語で書かれた多様な教科のものを現地で収集し、丁寧に読み込んでいる。たとえば歴史教科書を分析するに際しては、14の項目を体系的に設け、それぞれについて実態を調べている。さらに、これらの教科書本文の日本語訳が巻末に付されており、資料的価値もある。第1章の概念整理、第2・3章の歴史的経緯のまとめ方もおおむね妥当である。現地に足を運んでの聞き取り調査の結果も活かされている。

しかし、本論文には課題も残されている。まず、結論として、インドのセキュラリズムは宗教に友好的な宗教中立主義であることが述べられたが、それがアメリカ型の政教分離とどう異なるのかがいまひとつ明確ではない。なぜ宗教に友好的であるのかについては、歴史的・社会的背景、ヒンドゥー教の特性、ガンディーの思想等に解明の手がかりがあることを匂わせつつ

も、そこを深く追究し、答えを引き出すところまでは至っていない。

また、異なる年代に制作された教科書を集めつつも、網羅的ではないため、ヒンドゥー至上主義のBJP（インド人民党）政権の教育に対する影響を十分に掴みとれていない。同様に、ヒンドゥー・ナショナリズムと教育の関係を明らかにするには、地域による違いや、国立機関ではない民間出版社が制作した教科書との違いを確認しなければならないが、それらについては情報が著しく不足している。

以上のように、新領域を開拓する意欲的なテーマであったが、それゆえに分析が徹底せず、誰をも納得させるような新たな発見には至っていない。だが、これらの課題については、執筆者本人も自覚しており、今後どのように取り組んでいくかの見通しもついている。そのことも考慮し、学位授与に値するものと判断した。